

〔書評〕

鈴木耕太郎著 『牛頭天王信仰の中世』

児島啓祐

得体の知れぬ神名の響きに誘われて本書を手にした読者は、ページをめぐることに驚きを深めていくにちがいない。というのも、本書は文学研究の手法が駆使された専門書だからである。従来の思い込みに惑わされず、表現から誠実に意味を立ち上げる文学研究の方法論が存分に発揮された本書こそ、牛頭天王を書名に冠した本格的な研究書の嚆矢であることは、強調してもし過ぎるということはない。

本書は、二〇一七年に立命館大学に受理された鈴木耕太郎氏の博士論文『中世神話』としての牛頭天王——牛頭天王信仰に關するテキストの研究』に大部分が基づく著作である。最初に目次を掲げる。

緒言

第一章 牛頭天王信仰をめぐる研究史と本書の課題

第二章 祇園社祭神の変貌——卜部兼文・一条兼良・吉田兼俱の言説をめぐる

第三章 「感応」する牛頭天王——『阿婆縛抄』所収「感応寺縁起」を読む

第四章 陰陽道における牛頭天王信仰——中世神話としての

『籠篋内伝』

第五章 造り替えられる儀礼と信仰——『牛頭天王御縁起』

〔文明本〕の信仰世界

結語

本書の狙いは一貫して、次のような根強い固定観念を打破する点にある。

〈京都の夏の風物詩、祇園祭は、古代からつづく、八坂神社（祇園社）の祭神牛頭天王の祭礼である。牛頭天王は、スサノオと同体視される。〉

この〈祇園社祭神としての牛頭天王〉観ともいうべき一面的に

過ぎる理解が、従来の牛頭天王信仰研究を強く規定してきた。この問題点を著者は第一章にて膨大な研究史を整理しながら幾度も強調する。この思い込みにより、中世の牛頭天王の多彩な相貌を捉えられなくなっているのではないかと警鐘を鳴らすのである。

事実、〈祇園社祭神としての牛頭天王〉観は、古代から連綿と続くものでは決してなく、中世後期の文献に初めて現れるのだということを、著者は、第二章の「中世日本紀」の考察を通じて明らかにしてみせる。具体的には牛頭天王信仰を構成する要素としての初見例を、以下の四点に整理してとりあげたのである。①「牛頭天王」と「武塔天神」と「祇園社」が結びつく初出（『本朝世紀』）、②「牛頭天王」と「武塔天神」と「祇園社」が結びつく初出（十卷本『伊呂波字類抄』）、③「武塔天神」と「スサノオ」と「祇園社」が結びつく初出（『釈日本紀』所収『備後国風土記逸文』）、④「牛頭天王」と「武塔天神」と「スサノオ」と「祇園社」が結びつく初出（『公事根源』）である。著者は、これらの構成要素が少しずつ結合しながら〈祇園社祭神としての牛頭天王〉観（上記④に相当）が室町期に形成されていく、その信仰の歴史を跡づけたのである。これは、従来の研究が依拠していた前提を再考する重要な指摘であった。

それでは〈祇園社祭神としての牛頭天王〉観が成立する以前や同時代に、いかなる中世の多義的な信仰世界が牛頭天王をめぐって展開していたのか。その具体的な考証が、本書の第三・四・五

章に相当する。これらの章で実践される本書の方法は、著者が随所で説くように、「中世神話」論である。「中世神話」論とは、神話や神々の変貌に、宗教者独自の信仰世界を読み解き、それによって彼らが属する時代や社会の歴史の変容を明らかにする手法である。神話の起源よりも変容の経緯を重視する神話の史的研究ともいえる。本書における変貌や成長を重視する態度も、その方法論に起因する。それでは、本書の成果を次に紹介していきたい。

第三章では、感応寺縁起における牛頭天王の異貌の意義を説く。感応寺における牛頭天王の御利益は、観音信仰の影響を色濃く受けていた。台密の事相書『阿婆縛抄』には、観音の変化した姿として、「十一頭牛頭摩訶天王」という異様な尊格が登場する。この利益と、感応寺の牛頭天王の利益とが一致を見るのである。とりわけ本章における注目すべき考察は、当初老翁姿として現れた牛頭天王が、次第に成長を遂げる様相を論じた「第五節 宗教者・老演の力」である。縁起の場「感応寺」の名の通り、宗教者「老演」との「感応」関係を通じて、当初は川前の地主神に過ぎなかった牛頭天王が、感応寺の伽藍神へ、さらには清原氏の祖先神・守護神へと変貌していく様を論じている。殊に本章は、本書の狙いを鮮やかに実現した白眉であり、祇園社中心の牛頭天王観を相対化した好論である。

第四章では、中世の暦注書『叢篋内伝』巻一「起源部」及び「暦注部」を中心に、非官人陰陽師における牛頭天王信仰を解明する。『叢篋内伝』における牛頭天王は天道神すなわち曆神であ

る。防疫と菩提をもたらず救済の神である。興味深いのは、他書では救済される側の蘇民将来が、『靈籙内伝』では救済者（天徳神）に転じる点である。ここで著者は、前章の壺演のごとく、蘇民将来を宗教者として捉え、『靈籙内伝』を読み替えていく。牛頭天王は蘇民将来との「感応」関係をを通じて、童女と結婚し八王子を設け成長を遂げるのである。さらに表現としての「五節の祭礼」や「太山府君王の法」を新旧の陰陽道儀礼として読み解く。総じて、『靈籙内伝』は、非官人陰陽師が創り出した新たな陰陽道の起源神話（「曆神神話」）であると位置づけたのである。

第五章では、文明一四年書写の「牛頭天王御縁起」（以下、文明本）に見える儀礼の起源の語り直しやその造り替えを読み解く。『靈籙内伝』と文明本との比較を通じて縁起の展開や儀礼要素の共通点を指摘し両書の相互的影響関係を示唆した上で、文明本のみに見られる蘇民将来像に注目する。それは、牛頭天王が「牛玉」を蘇民将来に授け、現世利益を確約するという表現である。つまり、著者は防疫・除疫を中心とした祇園社の牛頭天王とは異なる、現世利益をもたらず牛頭天王という文明本固有の信仰世界を明らかにしたといえる。さらに興味を惹かれるのは、古端将来を呪詛する儀礼こそ牛頭天王を祀ることに他ならないという指摘である。呪詛を通じて牛頭天王の眷属へと人々が加わり、縁起の中でもその信仰が拡大していくと説く。この文明本自体も、「春三四季ノ行」に「読」まるる性質を帯びたものであり、著者は文明本の祭文化の可能性まで指摘する。

以上、三つの章はいずれも、〈祇園社祭神としての牛頭天王〉観にとどまらない、中世の豊かな信仰世界を、縁起・注釈書類の読み解きを通じて描き出した珠玉の論考群である。いずれも書物の性質や時代背景にこまやかに目を配りながら行われる示唆に富んだ分析である。

以下、四点、本書への疑問点を掲出する。

一、従来の室町物語研究が主導した中世神話論と、本書の立場はいかに切り結ぶか。本書第三・四章における神格の成長・変貌という類型的表現は、室町期の縁起物語類とどのような関わりにあるといえるか。さらに、第五章における文明本の実践的な読まれ方に関する分析も、本地物語の類型的表現に位置づけられるのではないか。

二、習合関係のなかで牛頭天王が語られる事例が多いのはなぜか。引用された例には盤古、十一面観音、スサノオ等の一側面として牛頭天王を示すものが多く見受けられる。主たる信仰が成立するのはいつからなのか。

三、いかなる立場から、著者はなぜ牛頭天王を論じるのか。たとえば、これまでも西田長男氏は神仏習合史構築のため、三崎良周氏は台密と陰陽道の交渉を探索するため、山本ひろ子氏は異神の象徴的な事例の一つとして中世固有の実践的な信仰や儀礼の論理を明らかにするため、といった牛頭天王を論じるそれぞれの立場や目的があった。本書がこれまで隠されていた中世の牛頭天王信仰を明らかにする意義とは何か。多様性の先に著者は何を志向して

いるのか。

四、「中世神話」論は、史料的な制約で儀礼や信仰の歴史的解明が困難な書物（第二章の『備後国風土記逸文』・第三章の感応寺縁起）や、信仰の担い手や場が不明瞭な書物（第四章の『篋篋内伝』・第五章の文明本）にも、果たして有効だといえるのか。書物の内部でのみ、成長・変貌を論じても、それは文学研究として興趣に富んだ読みではあり得ても、宗教民俗や神話史の解明に繋がるといえるのか。「中世神話」論は、文学の新たな読み方を示す研究ではない。あくまでその目的は、神話・信仰の歴史を明らかにすることである。本書を読みながら、絶えず拭い去れない疑問は、神の成長や変貌が意味するところの歴史である。牛頭天王と交感する宗教者たちは、いかなる歴史的現実の変化に対処すべく、この神の変貌した姿を語らなければならなかったのか。この問いに、著者は十分に答えていないように見受けられる。

とはいえ、断片的かつ難渋な牛頭天王の諸縁起に正面から取り組み、従来の祇園社中心の牛頭天王観を一新した点で、本書は画的論考であることに変わりはなく、その意義が色褪せることはない。今後も、著者が結語に述べているように、牛頭天王の祭文・講式類の分析や、本書によって見通された中世の姿がいかに関世において展開するか等、解明が待たれる課題は多い。本書の登場場によって、牛頭天王信仰の研究は今後益々進展が期待される分野となったといえるだろう。

（法蔵館 二〇一九年 三三二頁 税込価格 三、八五〇円）

（こじま・けいすけ 総合研究大学院大学博士後期課程）